

城下町異聞

川合 照

榊家には、代々伝わる不思議な掛軸があった。大晦日の夕方六時に床の間に飾られ、正月六日に取り外すのである。

必ず当主が自ら飾る決まりになっており、それも直系の家系に受け継がれて、ほぼ三百年以上も経つというものであった。何度も補修され、裏打ちされてはいるが、今では見る影も無いほど痛んでいる。が、年に一回床の間にでんと鎮座しますのである。

なんともオドロドロしい掛軸で、子供らは小さい頃からこの掛軸が嫌いであった。巾三十センチ、縦一メートルで、男子だろうと思われる姿が、今はもうおぼろげにしか見えない。眼を凝らすと、ザンバラ髪で目が吊り上り、右手に包丁とおぼしき物を持ち、右肩から褌がけで、足は自然と消えて見えない。子供の目からはどう見ても幽霊としか見えなかった。

「お父さん。この人は誰なの？」

父の答えはなんと聞いても、

「榊家の守り神だよ。この方が榊家を守り続けてこられた方なんだよ」

「何をしていた人なの？ なして榊の家を守っているのさ」

聞き返す子供等に、父は、

「うーん。お父さんもはっきりとは分かんねえんだよ。お祖父さんから、これは家宝であるから大事にするようにって申し渡されたものなんだよ」

「気味が悪いよな」

「お父さんも小さい頃はそう思ったもんだったよ。したけどな、これは榊家の大事な決まり事だからな、お父さんの後は強、お前が後を引き継がねばならないんだよ」

「なんか俺、あんまり有りがだくねえよ。二千年にもなってるのにさ、家宝だの家伝だのってあんまし古臭くて時代錯誤もいいとこだよ」

強は高校三年生、いわゆる現代っ子である。しかし父は、

「強、この掛軸をもし粗末にしたら、本当に罰が当たるんだってば、お父さんのひい爺ちゃんがな、お前みたいな考えでさ、大晦日にこれを飾らねがったんだ。したっきゃ、翌年一年中病人は出るは、家業は傾くはでな、ひい爺ちゃんあわくってその年の大晦日に床の間さ飾ったんだと」

「したら、それで災難が消えたのが」

「そう聞かされている。迷信がも知れねえばって、やっぱり大事にしようと思っているんだ、お父さんはな」

この掛軸のいわれは、大浦為信公が津軽藩を興し、その三代目信義の時代まで遡らなければならぬ。

徳川家康は、一六〇四年（慶長九年）に江戸城に入り、一六三五年（嘉永二年）三代將軍家光の時から、外様大名に二年に一度、江戸屋敷に居住して、將軍の統治下に入ることを義務付けた。とあるからこの話は、一六五〇年頃のことである。

大浦為信（後の津軽為信）は、豊臣秀吉時代に津軽藩を平定し、一六一四年（慶長八年）現在の弘前に城を築き、武家制度も江戸城の真似というか、そのまま使わせていた。

今でも弘前市には、五十石町、百石町、代官町、蔵主町などと、津軽藩時代の名残の町名が残っている。

為信公は、結構賢いというか、ずるいというか、氣転のきく殿で、幕府が、石高設定のため津軽に調査官を派遣したさい、弘前城の天守閣から眺めさせた。調査官は目の下に広がる津軽平野を見て、かなりの米の収穫量を見た。しかし岩木山の裏側もやはり津軽平野が続き、天守閣から見た平野は全体の半分であった。

「して、あの山の向こうはどうなっておるのかな」

問う調査官に、為信公は平然と、

「山の向こうは海でござる。なんなら見にいかれますかな」

そう言われて、

「いや、それには及ばん。海を見物に来たわけではないでな」

これで租税が半分になったと今でも語り草になっている。

したがって津軽藩は、けっくつ豊かで、隣の南部藩は日本のチベットと呼ばれるほど山また山で、田んぼが少なく陸稲と呼ばれる田しか作れなかった。

それを揶揄して津軽藩では、

南部の殿様

粟飯、稗飯

喉さからまる

菜の葉汁、菜の葉汁

と歌ったものだそうだ。

現在の青森県北津軽郡に、市浦という集落がその頃からあった。為信公の出身地であるとされている。為信公が弘前城に入ってから、市浦には屋敷があり、家来によって守られていた。

市浦の大浦家には、宮田惣右衛門という者が屋敷を守る責任者として勤めていた。

宮田家は子沢山の一家で、男子が三人女子が三人もの子持ちで、長男はいずれ父の跡を継ぎ、市浦に勤められるが、残りの男子は冷や飯食いの身分で、弘前城の足軽長屋に住み、城の足軽として、雑用をやらされていた。

一軒、八畳間に六人ずつが住み、便所と厨しかない粗末な家が城下はずれにずらっと並んでおり、その真中に足軽頭の少しい家が建っていた。

宮田直之進と弟の正之助は共に住んでいたが、賄も自分達で回り持ちで作らねばならず、料理の苦手な正之助は、兄の直之進にまかせっきりで、同室の他の連中も、

「直之進の食い物は、うめえがらな」

とこれもまた直之進任せであった。

その直之進は、小さい頃から台所に入っては、母に、

「男の子は、水屋に入るものでねえんだがら」

何度叱られても母の食事作りに興味を持ち、炊事の度に母の傍で見ているような子供であった。

足軽長屋の生活が始まってからずっと、直之進は進んで賄を担当した。

気転が利き、少ない材料で手際よく料理を作っては皆に喜ばれ、長屋の連中はだんだん直之進の部屋で食事をしたがり、

「これではお手当ての米が足りなくなるから、来ないでくれ」

頼むように言つ直之進に、

「じゃあ、俺たちの米や野菜を持ってくつから、一緒に作ってけろじゃ」

あちこちの部屋から持ち込まれた材料で、時として十人分、二十人分と料理に精を出す直之進であった。

そんなことが足軽頭の耳にも入り、ならばと、

「直之進。どれ、拙者にも味見をさせてくれんか」

「あれ、お頭まで、そんなごじやべって」

食べた頭は、

「なる程な、皆が誉めるわけじゃ。うん、うまい」

しきりに感心している。

直之進の隣の部屋に前田廣助という同年の足軽がいた。なにかにつけて直之進の部屋に来ては、お互いの将来の夢とかを熱っぽく語り合つよつになり、「直」「廣」と呼び合い、お互い生涯でただ一人の親友と思うようになっていった。

「直の将来の夢はなんだ」

「うん。俺な出来たらお膳部の賄い方になって殿様の食事が造りたいな」

「そうか、直は料理上手だからなあ。俺は馬屋番から出世して、太閤秀吉様のような人になりたいなあ。それにはまず侍方からだな」

太平の世に入つて五十年が過ぎていたが、それでも廣助は町道場にせつせと通い、剣術を磨くことに余念がなかった。

直之進も、暇さえあれば献立の研究に明け暮れ、料理の種類も日増しに増え、腕も上がつていった。

或る日のこと、足軽頭が登城した折、溜まり場に居た膳部頭と会つた。膳部頭の上には膳奉行が居る。今日は奉行と打ち合わせがあるのだと言つ。

世間話の途中で、足軽頭が、

「そういえば、足軽長屋に料理の上手い男がおりましてな、拙者も馳走になつたが、いや、なかなかの腕前でしたじゃ」

「ほほづ、足軽の中に賄いをのつ。して、年は幾つぐらいじゃな」

「たしか、二十歳と記憶しもうしたが」

この話はこれで終わり、それぞれの用事を済ませて帰宅した。

膳部頭は、榊宗左衛門といい、妻との間に娘が一人しかいなかった。この時代には男子

が跡目を継ぐしきたりで、娘しか居ない場合には、養子を迎えてその跡を継がせなければならなかった。

娘の琴は、もはや十七歳になり、いずれかに養子となる男子が居ないものかと、宗左衛門は常に頭を悩ませていたのである。

膳部頭の禄高は、百石であった。それに見合った相手となると、なかなか見つからなかったのである。

いつしか聞いて忘れていた足軽頭の話思い出したのは、書齋で一人思いあぐねていた時であった。

(本人が今足軽ということは、親は多分五十石かその下であろうな。一寸身分的になあ。ま、とにかく聞き合わせてみよう)

宗左衛門は、さっそく足軽頭の家を訪問した。

「ああ、それなら直接本人に会われたらいかがですか」

頭は気軽に、宮田直之進の長屋に案内した。丁度夕餉時で、外までいい匂いがしていた。

「直之進。客人をお連れしたぞ」

頭の言葉に、大きな鍋をかき回していた直之進が振り向いた。

宗左衛門は、鍋の中を覗き込んだ。膳部頭は当然のことながら料理にも詳しく、また舌も肥えている。

「ほう。何が出来るのかな」

「はい。味噌で具沢山の汁を作っております」

「なに！ 味噌を作ったと？ 城の賄い方でもこの頃やっと出来たというのに、若いお主がか？」

目を丸くする宗左衛門に、

「大豆が豊富にありますので、塩を少し多めに分けて頂いて作りました。それと、これはタマリでございます」

「タマリとは何じゃな」

「味噌の上澄みでございます」

指先につけて口に入れた宗左衛門は、吃驚して、

「城にもこのような美味なものはない。いや驚いたぞ。これをお主が一人で考えたのか」

「さんざん失敗も致しましたが、ようやく出来ましてございます」

「うーん。見上げたものよ。では、その汁を一口食させてはくれぬか」

椀に盛られた汁を食べて、宗左衛門はその美味しさにまた、吃驚した。中の具は、里芋、蒟蒻、大根、若芽、それにフワフワした不思議な物が入っている。

「これはなんじゃな」

箸の先に乗せて問うた。

「はい。私は油揚げと呼んでおります。豆腐を菜種油で揚げたものでございます。鶏肉があれば上等なのですが、その代わりでございます」

にこやかに直之進は答える。

「豆腐と申したか、してそれはいかがなものか。やはりお主が作ったのか？」

「はい」

「うん。唸るばかりじゃ。膳部の賄い方にもお主ほど工夫している者はおらん。どつじや、城の賄い方に入らぬか」

「ありがとございます。したがこちらの頭と相談させて頂きます」

「その通りじゃったな。いや、儂わしからも改めて貰い受ける手続きを取ることによつ。全く驚いた。いや嬉しいぞ」

小躍りするよつに、宗左衛門は足軽頭の家に急いだ。

半月ほどして、直之進は正式に膳部に配置換えになり、長屋を去ることになった。長屋の連中は、

「いやあ、これで直之進の料理が食えなくなるのが、なあ、直之進よ、止める訳にはいがないねえのが」

口を揃えて言った。が、ただ一人廣助は、

「直、よかつたなあ。これで賄い方の一人になれたじゃないが。俺も負けんぞ。頭に頼んでどうでも馬屋番にさせて貰うぞ」

「廣、お前と別れるのが一番辛いよ。でも俺、腕を磨いて弘前城一の賄い方になるぞ」

「そうだ。俺もきつと馬屋番から侍方になつからな」

二人はしっかりと握手した。

直之進は新入りの賄い方として、二十五人扶持として働き始めた。水汲みから下ごしらえ、洗い方と、下積みの仕事しか与えられなかったが、目を掛けて引き抜いてくれた膳部頭は、

「直之進。いつか馳走になった、油揚げなるものを造ってみてくれ」

仕事が済み、他の賄い方が帰宅してから、直之進はまず、豆腐造りから始めた。

津軽平野と呼ばれている通り穀類はすべて揃っていたし、日本海に面している北津軽地方では荒塩も作られていた。直之進は、塩精製時の上澄みの苦汁を手に入れて、豆腐を造っていたのである。

一人黙々と作業をする直之進に、時として廣助が手伝いに現れる。

豆腐作りは力仕事でもあった。大豆の擂りおろしから始まって、苦汁をまぜて型に入れて、重い石で押さえねばならない。

「廣、助かつたよ。ありがとな」

「なんのこれしき、剣道で鍛えた体には屁でもねえや」

真夜中に豆腐は完成した。

城の膳部は足軽長屋と比べられないほど材料が揃っている。良質の油で揚げられた豆腐は見事な艶をしていた。

「おお、出来たが。是非殿に召し上がって頂く。ところでどつちやって食べて頂くか」

直之進は、油揚げを火で炙り、一口大に切り、味噌とタマリと少量の砂糖を混ぜ、山椒を擂り潰してその上に載せて出した。

一口食べた宗左衛門は、唸った。

「うん。美味じゃ。これを今朝の献立に加えようぞ」

信義公もまた美食家であった。江戸への出府の折に様々な料理を口に行っているから、特に舌も肥えていたが、この油揚げの味噌掛けを食した殿は、

「なんとこの料理かは知らんが、今まで食べたことがないぞ。美味じゃ。膳奉行をこれへ、畏まって伺候した膳奉行に、」

「このような品を作ったのは誰じゃ」

「はっ！ 膳部頭、榊宗左衛門にござりまする」

「誉めおけよ。そしてますます精進するようにな。江戸の料理にも負けておらんとな」

最大級の誉め言葉を貰って、膳奉行は、

「榊、殿が大喜びされているぞ。これからも励んでくれ」

宗左衛門は、さっそく賄い方に赴き、

「直之進。殿があれを言われたそつじや。もっともっと殿を喜ばせるよう頑張れよ」

直之進は足軽長屋に走った。

「廣、あの豆腐の油揚げ、殿に誉められたぞ。お前のお陰で出来た豆腐だ。ありがとな」

二人で手を取り合い踊りあがって喜びあった。

直之進は、苦汁の量を加減することでよせ豆腐を作り、これに生姜を擂りおろしタマリを掛けて氷で冷やして出した一品も殿に喜ばれた。

二十二歳になった時には、膳部頭補佐として五十石取りになっていた。

この若さで五十石の扶持は異例の出世であった。

榊宗左衛門は市浦に赴き、宮田家に正式に直之進を婿養子にと、申し込んだ。父母に否やのあるう筈もなく、改めて娘の琴と見合いをさせた。

琴は城内でも指折りの美女であった。嫁に貰いたい、婿養子になりたいと申込は数多くありながら、宗左衛門の眼鏡に叶う者も居なく、琴はもはや十九歳になっていた。

町を歩く琴に、憧れの目を向ける侍や、足軽がどれほど居たことだろう。いや、町人までもであった。

廣助も胸を焦がし続けていた一人だった。ただ、身分が違いすぎるし、馬屋番風情で言葉を掛ける勇気がなかっただけで、恋焦がれる気持ちは誰にも負けないと自分では思っていた。

わざわざ遠回りしては、榊家の前をつろつき、琴が出てきはしないかとなん度も行きつ戻りつしながら邸内を覗き、ちらとでも琴の姿を目にした日には、幸せな気持ちで帰宅するのだった。

しかし、その当時の男子、まして侍などは女子に現を抜かすことなど口にするこもはばかられていた時代である。廣助は親友の直之進にさえもこのことは言わなかった。

琴と直之進の結婚が決まったのは、それから二カ月後のことである。

足軽長屋にも話が聞えてきて、

「いや、直之進も大出世だな。膳部頭の婿養子になるとは、この長屋も鼻が高いや」と噂であった。

一人悶々と苦しんだのは廣助である。

(琴殿と直が一緒になる。そんな馬鹿なことがあっていいものか。琴殿は俺のものときめているのに)

廣助は心に誓った。

(俺は一生かけて琴殿を思いつめる。たとえ今直之進と結婚しても、俺は必ず侍方になって琴殿にふさわしい身分になってみせる。それが三十でも四十でもだ。そして、琴殿を自分のものにしてみせる。必ずな)

二十年が過ぎ、榊直之進は四十二歳になり、琴は三十九歳になっていた。一男一女も丈夫に育ち、男子二人は寺子屋と道場に通い、娘は針子屋で和裁を習っていた。

直之進は義父の跡を継ぎ、膳部頭としてつとめ、禄高も義父を超えて二百石に増加され、ますます料理の腕をあげ、殿の召し上がり物は、必ず自分で手がけていた。

殿は江戸から帰ると、直之進をお側に呼び、

「直之進。このたびの江戸の土産は茶わん蒸しであるぞ。作ってみい」

時として、井物を申し渡したり、塩辛い塩漬け鯨が食べたい、みがき鯨が食べたいと、じぎじきに申し付けるまでに信頼を得ていた。

一方廣助は、ようやく侍方の班頭として百石の扶持米を貰ってはいたが、直之進との差は開くばかりであった。

世情の噂に、榊家の子供らは出来が良く、あれはきつと勘定方への道を歩むのではないが、娘も母に似て器量良しだから、きつと良縁があるに違いないとか、榊家の夫婦の仲睦まじいこと、まるで新婚としか思えないとか、耳に入る噂を廣助は聞き流すようにしていた。

広助も最早四十二歳になっていたが、妻も娶らず屋敷に下男と下女と三人で暮らし、酒に憂さを晴らしていた。思い浮かぶのは、

（おのれ、直之進。お前のお陰で俺はまだまだ幸せなるものとは縁遠い生活。それに比べ直之進。お前は！ お前は！）

齒軋りをし、直之進を一刀両断に斬り捨てる夢を見ては、汗をびっしょりかいて目覚める廣助であった。

（本当に直之進を斬り捨て、琴殿と一緒になれぬものか）

出来ない相談と知りながら、夜毎夢にうなされて、その心は日ごとに荒んでいった。

廣助のこの頃のなによりの楽しみは、庭木の手入れであった。煙草は吸わなかったが、庭木の虫除けにと、煙草を水に漬け、その上汁を筆の穂先につけては、一枚、一枚塗りつけて大事に育てていた。

その年の秋、二百十日に台風が襲来し、廣助の庭木のほとんどが被害を受けてしまった。丹精こめて育ててきた庭の草木であった。

（なぜに俺ばかりが不幸な目に会つのだ。これもあの直之進のお陰だ。あやつさえ居なければ）

筋違いの恨みを一度胸に宿した廣助は、それを打ち消すだけの理性がもはや失われている

た。

藩内の田畑の被害も耳にしたが、それを気の毒がる余裕さえ消えていた。

(憎や直之進！ 憎しや直之進！)

この一念に凝り固まった廣助は、なんとか一矢報いる方法はないかと、考えに考えた。次の日から廣助は、ちよくちよく膳部の直之進を訪ねた。忙しく立ち働いている姿を見ている廣助の目は暗かった。

だが直之進は、廣助が顔を見せてくれるだけで喜んでいる。そんな直之進を見ている廣助の心は痛みもしなかった。なにか落ち度でもないかと、目を皿のようにして膳部を見回していた。

仕事が一段落した直之進が、廣助のところへやって来た。

「直よ。殿が召し上がる前に誰が毒見をするのが？」

「まさか、俺が手がけたものだけは、殿に直接差し上げるのさ。熱い物は熱いうちに。冷たい物は温くないようにな」

「それだけ信頼されているってことが、たいしたもんだなあ。今では俺なんか本当は口もきいてもらえないくらい直は偉くなったんだなあ」

「廣。馬鹿なこと言つなよ。俺とお前の仲じゃないか、こうして訪ねて来てくれるだけで嬉しいよ。家のほつにも来てくれればもつと嬉しいのにな」

「ありがたいけど、俺、お前んとこの奥方が苦手だなあ」

「どうして？ いい奴なんだよ。心配りも行き届くし、お前が来たら歓迎してくれるよ」

「まあ、そのうちにな」

こうして話している廣助の臉に、琴の顔が浮かんだ。瞬間廣助の顔がゆがんだ。そうそうに廣助は帰って行った。

廣助は部屋で考えにふけっている。

(殿は毒見をさせずに食事を取るのか。もしそれに毒物が入っていたらどうするだろうか？ 直之進は切腹か打ち首か？ あの短気な殿ならそうするだろうな)

廣助の目が光った。もし運ばれる途中に、毒物を入れる機会があったとしたら、

(俺だと分からない方法で入れることは出来ないものか、そしてその毒物は？ あっ！

煙草の上汁！ そつかあの汁か)

こう考えてきて、

(いや、これは人間のすることではない。仮にも友達として過ごして来た直之進をそんな

目に合わせるわけにはいかない)

別の廣助が言つ。

(では、琴を諦めるのか)

(いや、諦められるならどれほど楽になるか、四十を迎えたあの臆長けた琴の姿。思っただけで震えてくるわ)

(ではやっぱり直之進を裏切るのか)

(俺にはそれしか生きるよすががない。やっぱりやるしかない)

廣助はそれからも賄所を訪ねては聞き込みをした。

殿の前にお膳が運ばれる経路を調べたのだ。

それによれば、直之進が非番以外のお膳は、賄所から膳奉行所に運ばれ、係りが殿の居室の前まで、すり足駆け足で運ぶことになっている。こ馳走が冷めて温くならないように最短距離で運ばれ、居室前の茶坊主に渡されて殿の前に供されるのだという。

茶坊主といつても、ただ江戸城の真似をしているだけで、茶の心得もなく身分も低く二十五人扶持で、殿のお側に居るといふ名譽が彼らを支えているだけで、手元不如意であり遊ぶ金にも事欠く状態であった。

廣助はこの茶坊主に目をつけた。一番側に使っている茶坊主の成庵という者の取り込みにかかった。

退出後、金のない茶坊主は、早々と家に帰る。

成庵も、クソ面白くもないという顔つきで、家路をたどっていた。その時、

「成庵殿ではござらぬか? 拙者、侍頭の前田廣助と申すもの。成庵殿に為信の殿のお話でも聞けないかとお待ち申しておった」

「殿のお話でござるか?」

「我ら侍方は、この太平の世で活躍も出来もさんが、殿が津軽を平定した頃の話でも聞きたいと思つてな」

廣助は巧みに成庵を酒処に案内した。個室に入った成庵は、

「馳走に預かれるのかな?」

卑しげにそう言つ。

「当然でござるつが、こちらが聞き役ですからな。まあ、まずは一献」

廣助は百石取り、成庵は二十五人扶持。本来ならば成庵ごときに敬語の一つも使わない立場にありながら、廣助は、ひたすら接待に努める。帰りぎわに、

「いや、胸躍る話を、かたじけない。これはほんのお礼で、いや失礼かとは思ったが」
懐紙に一両包んで渡した。成庵は広げて見てから、

「これは、これは。山吹色を久しぶりで見もつした。本当に頂いてよろしいのかな」

「遠慮めさるな、これからもちよくちよくお目にかかせてもらえないかな？ 色々お話が聞きたい」

下手に、下手に出る廣助であった。

「望むところどころ。あんな話を喜んで下さるとは、私としても嬉しい限りであります」

成庵は、一両の効果のせいか、廣助に丁寧な言葉で答えた。

(たったの一両でこの効き目か。なら、十両なら俺の話に乗るな。この茶坊主は)

廣助は、自分の目の付け所が正確だったことを感じ、満足した。

度々成庵と会い、その都度一両を渡し続ける一方、毒物の製造に取り掛かった。

水に漬けた煙草の上澄みは、そのままでは匂いもきつく、使えない。土鍋で煮詰める作業を始めた。水が少なくなればつき足しつき足ししながら、鍋の底に焦げ付かない程度に固めたのである。それを更に天日で何日も乾かして粉末に仕上げた。

(タバコの上澄みは、虫ならば一塗りで死ぬが、人間には多分それほどの効用はなからう。振りかけても死ぬようなことはあるまい。ただ、賄をした者の落ち度になるくらいだろう) それが廣助の狙いであった。

(とにかく直之進の手落ちにする為だ。殿の食事に振りかければそれで済む)

粉末を舐めてみたが、舌にほんの少しピリツとくるだけで匂いもなかった。

半年もした頃には、茶坊主の成庵は、廣助の言いなりであった。退出後は廣助の屋敷に入り浸り、下僕のごとく立ち働き、帰りには何がしかの金を貰うことを喜びとしていた。

廣助は、もはや頃合いと、

「成庵、この薬は元気の出る薬でな。南蛮渡来の物じゃ。是非殿に差し上げたいが、直接は無理な話なんで、どうじゃ、これを殿の膳の食べ物にふりかけて差し上げようと考えたんだ。これを飲まれて殿がますます元気になられたら、成庵そなたの手柄ぞ。やってみぬか」

紙に包まれた薬を広げて匂いを嗅いで見たが、特に異様な匂いもない。成庵は上目遣いに廣助を見、

「前田様、もしやといつとはいけませんまいな」

と問うた。

「もはやとはなんだ。たったこれだけで十両もした品物だぞ」

「えっ！ 十両も？ 勿体無い」

「馬鹿を申すな。殿の御身を案じればこそじゃ。おう、そつだ、成庵。成功した時はそなたにも十両やろつ。ほうびじゃ」

「えっ！ 私も十両頂けるんで？ 喜んでやりましょう。明日にでも早速に」

勢い込んで言う成庵だったが、廣助はまず直之進の非番の日を掴まねばならなかった。

二週間に一度の割で非番が回って来るらしいことは知っていたが、何月何日を調べねばならなかった。

「まあ、待て。このような高価な物、今一両日はわが家の神棚に奉ってからにしよう」

次の日廣助は、賄所に出向き、直之進の非番の日を下働きから聞き出した。

非番の日さえ分かれば、あとは何日に実行しよう、直之進の落ち度になることは目に見えている。

二日後薬物は成庵に渡された。

「よいか成庵。夕食に振り掛けるのじゃぞ。そうすれば、翌朝は元気浚刺で殿はお目覚めになれる筈じゃからな」

成庵は実行した。退出してすぐ廣助の屋敷に向かった。

「よし、これは褒美じゃ成庵」

十両渡し、そのまま酒処に繰り込んだ。成庵は懷を押さえながら、飲むわ、飲むわ、へべれけになるまで飲んだ。

次の朝、成庵の死体が岩木川の川原で見つかった。袈裟懸けに刀で斬られていた。

町方では、侍の試し切りであろうと簡単に片付けてしまった。

その頃城では、夜中から殿の腹痛が始まり、吐くは、下るはで、御典医は途方にくれるばかりであったが、吐き出した汚物を調べていた御典医は、少しく煙草の匂いを嗅いだよくな気がしたが、誰にも話さなかった。

殿は二日間胃痛に悩まされ、やっと快復した。

それからの殿の憤りのすざまじかったこと。

「直之進を呼べ！」

平伏している直之進を睨みつけ、

「直之進！ なんの遺恨があつて、儂に毒を盛った。これほど目を掛けてやった者のする

「何か？」

「殿の言われていることが理解出来ませぬが」

「一昨夜の夕食を取つてからの僕の苦しみを知らぬと申すか、うつけ者が！ 何故に僕に毒を盛つた！ 飼ひ犬に手を噛まれるとはこのことじゃ！ うむ、憎や！」

はつたと睨みつける殿に、直之進は、

「殿。私には何一つやましいことはございませぬ。殿に私めの料理を食して頂くのが唯一の楽しみで、今日まで精進して参りました。その私がどうして殿に毒など。わかりませぬ殿、調べさせて下さいませよう。少しの時を頂かせて下さい」

必死ですがる直之進であったが、

「ええ、聞く耳持たぬ！ 即、切腹申し付ける。立ち会ひ人は膳奉行じゃ！ 退がれ！ 退がれ！ 顔も見とつはない！」

膳奉行が呼び出され、直之進の切腹に立会い、その頭髪を城に持参することになった。

武家屋敷には必ず三畳間という部屋が用意されている。切腹の間である。

直之進は、すぐ退出し、妻や子供にこの次第を話した。

長男の直之丞は、

「父上。もしかの儀に嵌められたのでは」

「そつに違いないが、調べる時間も殿は下さらなかつた。しかし殿を恨んではならぬぞ。いずれ榊家はお取潰しになるやもしれぬ。それでも先の希望を捨ててはならぬ。お前も最早十六じゃ。元服も済んでいる令、母上や弟、妹の面倒を頼んだぞ。必ず殿を恨むでないぞ」

この言葉が直之進の遺言であつた。直之進は、見事腹真一文字にかき斬つて果てた。

立会人の膳奉行は、直之進の遺髪を持ち帰るさへ、

「立派な切腹であつた。殿には逐一報告いたす。濡れ衣と分かつていても殿の命令に従つた直之進殿。見上げた侍よのう」

そつ言い置いて城に向かつて行つた。

短気な殿は、やはり榊家を閉門させた。琴と子供らは蟄居の身となり、寺子屋にも道場にも通えなかつた。

初七日の日、誰一人訪れる人もない榊家の裏門に男が立つた。前田廣助であつた。人目を気にしながら裏木戸をおし、厨の戸を開けた。目ざとく見つけた琴が、

「どちら様でしょうか。当方只今閉門中でございますが」

「前田廣助と申す侍頭にございます。このたびの直之進殿の不幸を聞き、なんとか仏前に手を合わせたくて、忍んで参りました」

「では、主人がよく申しておりますました廣助殿でしたか。よくお出でくださいました。人目もあります。まずお入り下さい」

仏間に通された廣助は、直之進の位牌を前に号泣した。口の中でブツブツ言いながら、琴の前で涙を流した。

琴も家人も、子供らも仏間に入り涙を流した。

二十七日、ふたなのか三十七日、みなのか四十九日と廣助は榊家にやってくるまでは、なにこれとなく世話を焼いた。
(亡き旦那様の死をこれほどまでに悲しんで下さる。有りがたいことです)

琴は世間の冷たさを思うにつけ、廣助にただ感謝するだけであった。

百か日を迎えた日、琴は、

「廣助殿。もう充分に尽くして頂きました。直之進もきつと喜んでいいることと思います。どうぞ、もうこれっきりにして下さい。女子所帯でございますれば、世間の目もありまする。」

言い終わらないうちに廣助は、

「いや、こうして足を運んで参りますのも琴殿のためでございます。直之進とはいい友達として過して参ったが、お一人になられた琴殿を放っておけぬのじゃ。拙者の気持ちを察して、拙者の気の済むようにさせて下さい。琴殿とこうして話が出来ただけで嬉しいのです。お氣遣いなさらずに。これから参らせて頂きます」

琴は異な思いに捕らわれた。

(この廣助殿は、亡き旦那様を思われて来てくれてはいなかったのか？ まさか、まさか、この私を狙っておったのか？ まさか、そんなことが……)

その夜、琴は仏間から出て来なかった。夜通しローソクを灯し線香を絶やさずに、一心に直之進に祈った。

(旦那様。どうぞ榊家をお守り下さいませ。私の夫は貴方様ただ一人でございます。琴をお守りくださいませ。無念で死んだ旦那様の嫌疑がいつか晴れますように、力を貸して下さいませ)

翌朝子供らは仏間で気を失っている琴を見つけた。

祥月命日に廣助がまたやってきた。

仏間で丁寧なお参りを済ませ、居間に入って来た廣助は、子供達に土産を渡し部屋に引き取らせた。

「琴殿 今日折り入って話があります。聞いてくださいませ」

「なんでしょうか？ 膳奉行様のお陰で閉門は解けましたが、主人の落ち度の原因はまだ分かっておりませぬ。このような時になんのお話でしょうか」

暗に聞きたくないという態度の琴であった。

「このう琴殿、こうして暮らしていても物入りのことでしょうか、いずれ何年かしたら拙者も直之進と肩を並べる石高になりもつそつ。私をこの家に住まわせては貰えないだろうか。必ず力になりましようぞ。恥ずかしながら、琴殿を思い切れなんだ。頼む、一緒に暮らさせて下されえ」

切々と訴える廣助であったが、琴には身震いするほど聞きたくない話であった。

「何と言われる。旦那様が逝ってまだ半年足らず、聞きたくもございませぬ」

剣もホロロに断る琴に、

「すぐでなくても、せめて一周忌が済んでからでもいかがかな？ 琴殿 そのお年ではまだまだ一人身は辛かるうが」

「見下げ果てたお方ですねえ。お戻りください。お帰りください」

「いや、なかなか。拙者は諦めませぬぞ。毎夜でも口説きに参りますぞ」

廣助は琴の側ににじり寄った。肩を抱き寄せよつとした時である。

ズン！

家鳴りがした。はっと驚く琴と廣助。行灯がフツと消えた。つけ直そうと琴は真つ暗な中でいざつた。

『廣助 お前の心が見えたぞ！ 計つたのは廣助、お前か！』

暗闇の中に太い男の声が響いた。

「なに奴。俺を呼び捨てにするとは無礼な」

刀に手を掛けて廣助は叫んだ。

『廣助！ 直之進だ！ 聞き忘れたか俺の声を！』

「直之進？ まこと直か？ ならばなぜ姿を見せぬ。琴殿、早く明かりを」

琴は行灯に火を入れた。明るくなった居間の上座に直之進がすわっていた。

「あつ！ 旦那様」

琴が近寄る。廣助はさすがに恐れるふうで、壁際によつた。

賄所で立ち働いていた直之進そのままに、作務衣を着て、肩から褌を掛け、向こう鉢巻をし手には包丁を握っている。

『廣助。そなたの企み、今分かつたぞ。それほどまでに琴に懸想していたとは、俺も気付かなんだ。それにしても見事に俺を嵌めてくれたな!』

「直。誤解だ! 俺は、俺は何もしていない。あれは成庵がやったこと。俺ではない」

『口を割つたな。その成庵を叩き殺したのは誰だ。お前だろうが。なよりの証拠である。う。すべてお見通しよ』

「.....」

無言で廣助が直之進に斬りつけた。刀は空を切っただけであつた。

「ピシッ!」

廣助は額を押さえて片膝を着いた。額から血が流れ出ていた。

「おのれ直之進。武士の額を!」

しゃにむに斬りつける廣助。当たつたと思つても刀は空を切る。

『廣助、忘れたか。俺は死者だということ』

齒ぎしりをし、直之進を睨み付けていた廣助は、転がるように出て行つた。

翌朝、琴は切腹の間の襖を開けた。そこに琴は直之進を見た。奥の襖に昨夜の直之進の姿がそのまま映し出されていたのである。

琴は膳奉行に使いを走らせ、昨夜からの一部始終を話した。襖の絵を見て、膳奉行は、

「直之進殿の執念でござろうな。いや、見上げたものでござる」

この日の朝、直之進の墓前に廣助の自害し果てた姿が見つかった。その顔はまるで足輕時代に戻つたかのように、穏やかであつた。

膳奉行の話聞いた殿は、

「儂の短慮から、あたら人材を無くしたか。許せよ儂が悪かつた。榊の子息は、膳部の配下として務めさせよ。いずれ直之進の位になれるように、そちが仕込んでやれ」

膳奉行は大喜ひで榊家に報告した。

「お奉行様、ありがとございます。お陰で榊家は滅亡を免れましてございます」

こうして長男の直之丞は、父の跡目を継ぐことになつたのである。

直之丞の初登城の日、琴は、襖絵の直之進に、

「旦那様 やっぱり榊家をお守り下さいましたのね。この後もこの部屋で旦那様と語りましょ。ありがとございまして、貴方」

琴が身罷った後、直之丞はこの襖紙を剥がし、表具させて掛軸にした。そして、一巻の巻物をつけた。

榊家の掟

- 一 掛軸は代々直系の家に伝えるべし
- 二 大晦日から正月六日まで床の間にかざるべし
- 三 必ず粗末に扱つべからず

右のことを疎かにする者には罰が下るであろう。父直之進の御心の入った掛軸であること
とを肝に銘じるべし

三代目

榊 直之丞 印

あれから三百年余、書き残した巻物はすでにないが、おぼろげに姿の残った直之進の掛軸はこつして榊家の家宝として代々引き継がれて来たのである。

そしてこれからも、たとえ白紙にしか見えない掛軸になっても何年も引き継がれることである。

完

タイトル 城下町異聞

本名 川井 律子

筆名 かわい 川合 てる 照

〒 036 8043

住所 青森県弘前市東和徳町6 3

ケアハウス・アップル503号

電話番号 0172 36 1360

FAX 左に同じ

職業 無職

略歴 六年間文章教室で勉強しただけです。なんとか応募してみましたが、二次審査どまりでした。

原稿枚数 48枚